

【特集II】

公開講座シリーズ  
ピティナ・ピアノ  
フェスティバルVol55

ピアノの誕生と  
ソナタ形式の確立

去る8月30、31日の2日間に渡り東京音楽大学ホールにて開催された、ピティナ・ピアノフェスティバルVol.55は、昨年までのJ.S.バッハシリーズに引き続き、今年は「ピアノの誕生とソナタ形式の確立」というテーマで行われた。本号では、小倉貴久子先生の講座の概要を、次号では土田英介先生の講座をお届けする。小倉先生の講座は、チェンバロ、クラヴィコード、フォルテピアノの音色を弾き比べながらのもので、その音色をお届けすることはできないが、紙面からその様子を感じ取って頂ければ幸いです。

●古典派、バロックの時代の楽器

ピアノという楽器が生まれる前にはチェンバロの全盛期でした。なぜチェンバロではなく、フォルテピアノという楽器が求められたのか、その辺を探るためにまずチェンバロのお話をします。

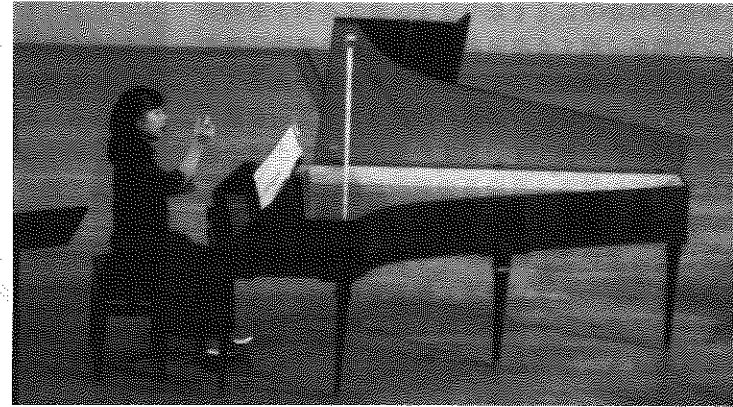
チェンバロの音色をきかれたことのある方もいらっしゃるかと思います。ピアノとは全く違った音色を持っています。弦をはじいて音を出すのでハープのように撥弦楽器です。非常に美しい魅力的な音がします。チェンバロにはいろいろなタイプがあります。1段の鍵盤からなるもの、2段の鍵盤からなるもの、大きさやストップも様々です。2段の鍵盤のものは上段は比較的やわらかい音色で小さい音、下段ははっきりとした音色で上段よりはやや大きな音を出すことができます。曲の中で2段を使い分け、演奏します。そして上の鍵盤を奥にいと、下の鍵盤

公開講座

「フォルテピアノの誕生と  
古典派音楽の語法」

講師：小倉 貴久子

●ピアニスト



古典派の音楽というのは、とても刺激的で楽しく、そして興奮する音楽なのにもかかわらず、なぜか日本だけでなく世界でも試験の課題曲であったり、コンクールの審査の対象の音楽であったり、勉強するという意識で弾かれることが非常に多いように思われます。皆様も、ロマン派や近・現代の曲の方がラフな気持ちで演奏し、古典派の音楽は堅苦しいというイメージを持っていらっしゃる方も多いのではないのでしょうか。そこで今日は、古典派の音楽はこんなに生き生きとしたものなのかということを当時の楽器、価値観、常識などを知ることによって理解して頂きたいと思っています。

を弾くと同時に上の鍵盤も弾け、2本の弦が同時に撥音されます。そのため、音が大きくなり、フォルテとピアノを使い分けることが出来ます。しかしクレッシェンド、ディミヌエンドなど、細かい強弱の変化というのはできません。

バロック音楽というのは、対位法で出来ており、線の音楽です。いくつかの声部があり、その声部を重ねたり、少なくしたりすることによって音楽の表現を行います。バロック音楽の形式の典型的な例にリトルネロ形式がありますが、ソロとトゥッティを交互に使い分けていく方法で、J.S.バッハはイタリア協奏曲の中で見事に表現しています。

●社会的背景の影響を受けた楽器の変化

それではなぜバロック音楽から、古典派の音楽へ変化していくのか、何を要求していたのか、その部

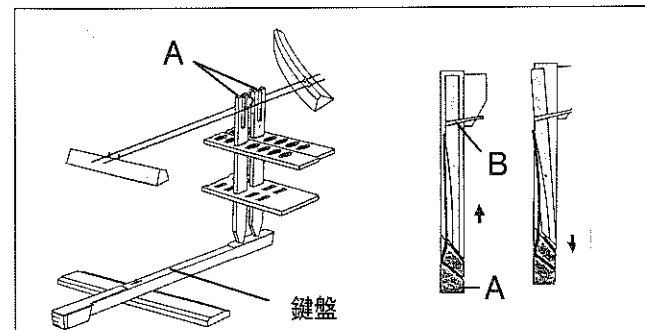
分を探っていききたいと思います。そのためには、当時の社会の動きというものをみていく必要があります。

17世紀から18世紀にかけて、人々は、神様、王様、など超人間的なもの、あがめられたものに自分は仕えているという意識で生活していました。ですから、J.S.バッハの音楽というのもほとんどが神の為に作られた教会音楽で、自分のために曲を作ることはほとんどありませんでした。社会も、自分という一人一人が主張できる時代ではなく、人に仕えて生きるという時代だったのです。

18世紀の始めには、「私達は人間である」ということを意識しだす風潮が出てきます。それを「啓蒙思想」といいます。人間中心、人道主義といい、人間にあるさまざまな感情、怒り、喜び、哀しみや、苦しみなどを表現したものです。文学の世界で起こった「シュトゥルム・ウント・ドゥラング」(疾風怒涛)の強烈な表現方法はその後、音楽の世界へ入ってきました。その啓蒙思想を世に広めた人物としては、ウィーンのヨーゼフ2世、ドイツのフリードリッヒ2世があげられます。

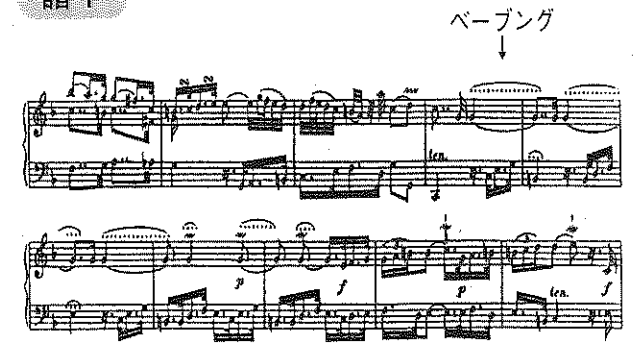
啓蒙思想というのは人間を基調に思うわけですから、フリードリッヒ2世は、人間のする文化を愛好し、沢山の画家、音楽家を雇っていました。その中には、J.S.バッハの2番目の息子、カール・フィリップ・エマニュエル・バッハ(以下 C.Ph.E.バッハ)、ベンダなどの作曲家や有名なフルート奏法を書いたクヴァンツがいました。

有名な絵で、サン・スー・シー宮殿というところで、フリードリッヒ2世がフルートを吹いていて、その隣で男の人がチェンバロを弾いている、周りで人が見ているという絵がありますが、ここでチェンバロを弾いているのが、C.Ph.E.バッハです。フリードリッヒ2世自身も巧みなフルート奏者で、芸術を愛好



チェンバロの機構と構造：鍵盤を押下げると、ジャック(A)の部分が上がり、ジャックの部分がプレクトラム(B)という爪で弦をはじくという仕組み。プレクトラムは当時は鳥の羽の芯を削って作っているため、非常にしなやかで、やわらかく弦をはじく。

譜1

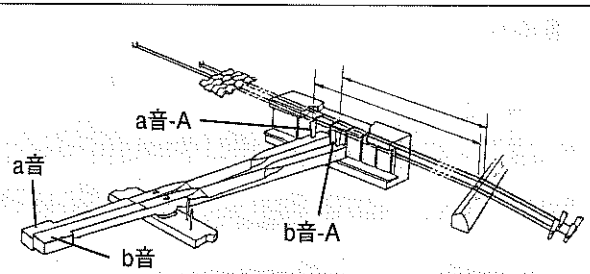


していたので、フリードリッヒ2世のまわりにいた音楽家たちは、啓蒙思想をもとに音楽を自由にすることができ、非常に斬新な音楽を作っていたのです。

その中から、バロック音楽とは違った新しい音楽が生まれてきました。この感情の赴くまま演奏する、そのような典型的な音楽として、C.Ph.E.バッハの「識者と愛好家のための曲集」というのがあります。この「識者」とは、音楽に対して見識のある人という意味で、愛好家というのは、音楽の好きな人という意味ですから、音楽が好きな人だけ聴いてくれればいい、演奏してくれればいいというつもりで作っています。それまでは王様や神様のためにつくっていたのが、音楽の好きな人のため、自分のために、自分の好きなようにつくるという時代に変化したのが分かると思います。しかし自分の感情の赴くままに演奏したい気持ちで作曲した曲なのですが、チェンバロだと多少不便が生じてきました。細かいニュアンスを演奏するにあたって、鍵盤が上にいたり下にいたりするのは音楽がとぎれやすくなってしまいます。またクレッシェンドしたり、ディミヌエンドしたりして表現することができないのです。そのためのとっておきの楽器がバロック時代にありました。それがクラヴィコードです。

クラヴィコードはチェンバロと違い、クレッシェンドやディミヌエンドが可能です。そしてこのクラヴィコードのすばらしい点というのは、タンジェントが弦に直接接触していますので、ビブラートができるのです。ドイツ語では、ベープングといえます。「識者と愛好家のための曲集」の楽譜をみていただきますと、上の段、下の段ともに、gの音にスラーに点がついていますが、これがベープングのマークです。まさにクラヴィコードのためにC.Ph.E.バッハが書いた曲というのがお解り頂けるかと思います。

しかし、よく耳をすまして聴かないと非常に音量



クラヴィコードの仕組み: クラヴィコードは、上からみると弦が鍵盤に対し横に張られている。鍵盤を押した先の部分に金属の板でできたタンジエント (A) がついており、鍵盤を押すとタンジエントが押しあがる、というしくみになっている。音が小さいが、タンジエントは鍵盤そのものについているため、様々なニュアンスを出すには非常に適している楽器といえる。

が小さく、私もクラヴィコードは寝室に置く楽器だと思っているくらいです。ちょっと大きい部屋だと様々な音楽表現を聞き取ってもらうにはかなり無理があります。そこで、もっと他の方法でさまざまな音色が出せるようにならないものかと、当時の作曲家や製作者たちが思っただけのも無理はありません。

そこで、弦をたたいてみたらどうかということになりました。叩く楽器はそれまでもあったのですが、音楽表現のできる楽器としてピアノが誕生します。1698年、または1700年といわれていますが、イタリアのチェンバロの製作者のパルトロメオ・クリストフォリが、『ピアノからフォルテまで出せるチェンバロ』という名を持つ楽器を考案します。チェンバロの音に非常に近い、しかし音のニュアンスの変化、クレッシェンドやディミヌエンドなどが可能です。音量も、チェンバロよりは多少小さいですが、コンサートでも問題なく使えるほどです。

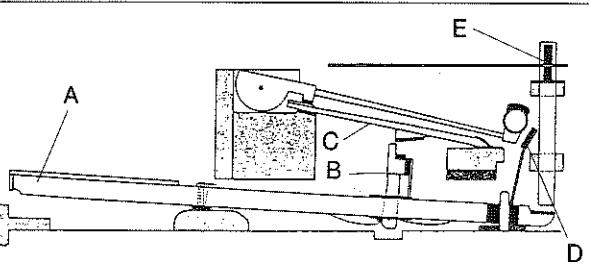
しかし、何故か当時は人々に圧倒するような感動を与えませんでした。その理由として、チェンバロ、クラヴィコードの名手はいても、ハンマーのついたこのフォルテピアノをうまく演奏する人がいなかったという理由が一つと、ピアノのための曲が無かったということがあります。実際、クリストフォリが死んだ次の年にロドヴィーコ・ジュステーニという人が12曲からなるソナタ集が、初めてダンパーのついたピアノのために書かれたものです。

それではどの辺りから、チェンバロではなく、フォルテピアノになったのでしょうか。ハイドンは、鍵盤楽器の為のソナタを非常にたくさん作っていますが、ハイドンはすべてピアノのために書いたわけではなく、その多くがチェンバロのための曲です。後期に作られた皆さんがよく知っている辺りの曲はピアノのために書かれています。では、どの辺りか

ら変わってくるのでしょうか。実は、1774年に出版されたHob.XVI/23はまだチェンバロに書かれた曲です。しかし1780年に出版された「6つのクラヴィーアソナタ集」Hob.XVI/35の冒頭部分に「この曲集は、チェンバロ、またはフォルテピアノの為に」というふうに書かれています。よって1780年出版の曲からピアノの為に書かれた曲というふうに考えていいと思います。なぜチェンバロと言う言葉を入れたかということですが、当時フォルテピアノを持っている人は少なく、「フォルテピアノの為に」と書くことが出来ないのでチェンバロという言葉が入っているのです。そのため、「チェンバロかフォルテピアノのための作品」と書かれていても、ここからピアノのための作品集と考えていいでしょう。

### ●様々な変遷を経て現代のピアノへ

ドイツでフリードリッヒ2世のもとで仕事をしていたオルガン製作者の家系のジルバーマンという楽器職人が、当時クリストフォリのフォルテピアノについて書かれたマッフエイの論文を基に、フォルテピアノを作ることを試みました。1736年、当時から有名だったJ.S.バッハにそのピアノを持っていきます。しかしJ.S.バッハは「アクションが重いし、高音部が弱い。あまりいい楽器ではないね」と苦情を言いました。そしてジルバーマンは、難しいアクションを一生懸命作ったにもかかわらず認められなかったことに気落ちしてしまいます。しかしジルバーマンはそこであきらめることなく、「自分が読んだマッフエイの論文が間違っているのではないか、もしかしたらもう少し良い楽器が作れるのではないだろうか」と思い、クリストフォリの楽器を見にイタリアに行ったようなのです。実はマッフエイの論文には間違



クリストフォリ製作のピアノのアクション: 鍵盤 (A) を押すと、ジャック (B) が中間レバー (C) を押し上げ、中間レバーがハンマーについている棒を押し上げることでハンマーが弦をたたくという構造。ハンマーが弦を打った後、2度打ちしないようにチェック (D) で押さえ、中間レバーをつけることにより連打が可能となった。今では当たり前ではあるが、弾いていない弦の振動は押さえ、弾いている弦のみの振動を起こすダンパー (E) という以上の発明により、クリストフォリは素晴らしいピアノを作ることに成功した。音質の点でも、皮を巻いた中は空洞のハンマーを使用することによって、非常に明快な発音ができるようになった。彼の発明は、現代のピアノに多少の改良が加えられているだけで、ほとんどそのまま使われている。

っている点がたくさんあり、ジルバーマンはもう一度、楽器を作り直しました。1746年に完成したものをフリードリッヒ2世に見せたところ、たいへん気に入られ、その場で15台購入したといわれています。その翌年、フリードリッヒ2世に使えていたC.Ph.E.バッハに会いにきた父親のJ.S.バッハは、そこでそのピアノを弾き、素晴らしい楽器だと満足し、J.S.バッハは、王様の与えた主題「音楽の捧げ物」のテーマでフーガを即興演奏したというエピソードが残っています。

ジルバーマンのレプリカの音を聞いてみますと、クリストフォリの音よりも少しピアノに近いという感じもします。ジルバーマンの楽器というのはかなり完成度が高く、ピアノは社会にどんどん浸透し発展していきましたが、J.S.バッハもピアノを褒めていながらも、ピアノではなくチェンバロのために音楽を書きましたし、チェンバロの音の方を好む作曲家も多かったようです。ですから、新しい楽器、ピアノのために曲を書く人もいれば、チェンバロのために書く人もいて、チェンバロを好んで演奏していた人もいれば、ピアノを好んで演奏していた人もいたというふうには、この時代はピアノとチェンバロが共存していた時代なのです。

ジルバーマンは、ドイツの製作者ですが、彼が作ったピアノがその後ドイツで受け継がれていったのかといいますと、実はそうではありません。その地方でピアノが進化していくことなく、ジルバーマンの工房で働いていたツンベを含む職人達は皆イギリスへ渡り、クリストフォリによって発明され、ジルバーマンによって受け継がれたアクションをもつピアノをイギリスで作り始めました。ブロードウッド(後にベートーヴェンが彼のピアノを使用する)もツンベ達と一緒にピアノを作り始めました。そうして、クリストフォリが発明し、ジルバーマンによって受け継がれたアクションは、イギリスで開花したのでイギリス式アクションと呼ばれます。

そして、ツンベは四角い形の「スクエアピアノ」というのを作ります。なぜこのような形にしたかという、簡単につくれる、安くつくられる、安く作れると安く売れる、安く売れると、普及する、そのような理由でたくさんのスクエアピアノがイギリスで作られました。その影響で、イギリスの中産階級、上流階級の人々がたくさんこの楽器を購入し、ピアノという楽器がどんどん浸透していきました。楽器が浸透すれば弾く人も多くなる、作曲家も曲を作る、という風に、ピアノの音楽があつというまに広まっ

ていったのです。その後イギリスのアクションは今度はフランスのプレイエル、エラールなどフランスのメーカーに引き継がれていきました。そして、フランスのイギリス式アクションが現代のスタインウェイまで引き継がれていくのです。ですから、現代のピアノのアクションというのは、クリストフォリがイタリアで発明し、ドイツへ行って、それからイギリスからフランスへという風に、大変国際的な経過を経て、現代のピアノに引き継がれた行ったわけです。



実は、イギリス式アクションの他にもう一つ別のアクションを持つピアノがありました。ジルバーマンの引き継いだクリストフォリのアクションは現代のピアノに非常に近く、大変複雑でもあります。中間レバーをつけて、突き上げ式にすることによって、重いタッチになってしまいます。ピアノをもっと軽いタッチにできないかという動きが、ちょうどジルバーマンがピアノを作っていた時にドイツで起こっていたのです。シュタインという人が作り上げたと考えられているもので、構造上、ハンマーを跳ね上げて弦を打つような形なので、跳ね上げ式アクションと呼んでいます。イギリス式アクションを突き上げ式、ウィーン式アクションを跳ね上げ式と呼んでいます。イギリス式アクションが重いと言っても、現代のピアノに比べれば非常に軽いのですが、ウィーン式アクションはさらに軽いものでした。タッチが軽く、そして音色も非常に軽やかなので、ウィーンの作曲家達に非常に好まれました。

ウィーンでの作曲家というのは、まず、モーツァルトがあげられます。モーツァルトは、シュタインの楽器を非常に好んで使い、その後、ヴァルターの楽器を好んで使います。それからベートーヴェンです。彼はシュタインも多少弾きましたが、初期、中期の1802年頃まではヴァルターでした。後にロマン派になってくると、多少大きくなりますが、シュ

マン、ブラームスなど、ウィーン・ドイツ系の作曲家達は、イギリス式アクションよりもウィーン式アクションのピアノを好んだと言われています。

ヴァルターの鍵盤の幅は現代のピアノよりも狭く、深さも非常に浅いため軽やかなパッセージ、ニュアンスがとてもやりやすいのです。弦は鍵盤に対し平行に張られています。それに対し、現代のスタインウェイですが、弦が交差してはられている形（交差弦と呼ぶ）です。弦の張り方でどういう音の違いがあるかといいますと、交差弦にしますと音が混じり合い、混じり合うことによって音量が増します。音量を求めていくためだんだん交差弦が使われるようになってきましたが、それによって各音域での音色のはっきりした違いが聞きづらくなりました。

ウィーン式アクションの音色を好んだ作曲家は多勢いて、音域の拡大と共に楽器も大きくなっていくのですが、絶対的な音量には限界がありました。またウィーンのメーカー達は、音量の大きさではなく、音の美しさを求めていました。例えば、音量をだすためには、ハンマーを大きくしたり弦を太くしたりして音量を大きくすることが可能ですが、そうすると弱い木のフレームが割れてしまいます。それを支えるために、現代のフレームのように鉄骨を入れるという案ももちろんありましたが、鉄骨のフレームを入れると音が悪くなってしまいます。木の音を大切にすることによってこだわることがゆえに、ウィーンの職人達は、どうしても鉄骨のフレームを入れたくなかったわけです。

しかしイギリス式アクションは、フランスで様々な演奏家に弾かれ、場所も部屋からホールへと変わっていきました。そうすると、大きい音を要求されてきます。そこでスタインウェイが鉄骨フレーム、交差弦を導入します。木だけでできていると湿度や温度によって調律が狂ったり、中のアクションが調

整不良になったりと管理が大変なのですが、鉄骨フレームや、イギリス式アクションは割合安定しています。そして何より迫力のある音が出るなどといった理由でイギリス式アクションの全盛期になります。その結果ウィーンの職人達はまけてしまい、19世紀の終わり頃にはウィーンのピアノというのは廃れてしまいました。

しかし、私たちは今ウィーン式アクションのピアノで作られた曲をたくさん弾いています。現代のピアノだと、どうしても一つ一つの絶対的な音が大きいので、これはテンポ感にも影響してきたり表現方法も変わってしまうのです。そのためウィーン式フォルテピアノで、モーツァルト、ベートーヴェンを弾くと現代のピアノでは想像し得なかったことを表現することができ、これが200年前の音楽に生命力を復活させることになってくるのです。このようにウィーン式アクションのピアノは、見直されてきています。

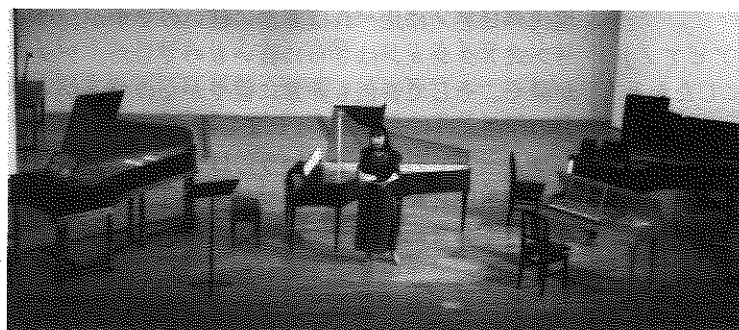
### ●古典派の語法

古典派の語法を語るためには、バロックの語法を知る必要があります。なぜならバロック音楽と古典派の音楽が同居していた時代というものがあ、バロック音楽を演奏してた人達が、古典派の音楽を演奏していたわけですから、バロック音楽の語法も知って頂きたいと思ひます。

#### 【拍節感】

バロック音楽、古典派音楽の一番重要なもの、それは拍節感、リズムというものです。プラトンの言葉に「まずリズムありき」という言葉があるように、まずリズムが重要な訳です。そして拍節感というのは、簡単にいってしまえば、2拍子、3拍子、4拍子、という拍子感です。2拍子というのは、1拍目が強拍、2拍目が弱拍、3拍子というのは、1拍目が強拍、2、3拍目が弱拍、4拍子というのは、1拍目が強拍、2拍目が弱拍、3拍目が中強拍、4拍目が弱拍このように小学校で習いますが、まさしくこのとおりのことが拍節感です。そして、バロック音楽も古典派音楽もこの拍節感を守って演奏しないと、いかにつまらない音楽になるか、もしくは、全く違った方向のものになるかということをご皆さんに知ってもらおうと思ひます。

C.Ph.E.バッハの「識者と愛好家のためのソナタ第1番」の第1楽章（譜2）

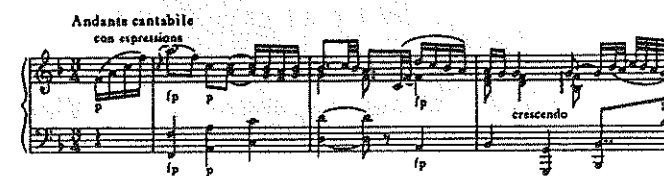


上写真：当日はステージに、バロック時代に栄華を究めたチェンバロ（左）、小倉先生所蔵のヴァルターの1795年の楽器を複製したフォルテピアノ（中央）、クラヴィコード（右手前）、そして現代のスタインウェイピアノ（右奥）が並べられた。

を見ると、2/2拍子なので1拍目が強拍、2拍目が弱拍になります。これを拍節感を持たずに演奏するとどうでしょうか。重い感じを受け、何拍子かもよく分からないですね。拍節感を持たずに演奏すると、バロック音楽、古典派音楽というのは、精彩のかけた音楽になります。そして、拍の重要性というのは、当時の演奏についての様々な教本にははっきり書かれています。

この曲を拍節感をもって演奏してみると、曲が非常に生き生きすることがわかると思ひます。拍節感を持って演奏すること、すなわち、1拍目に強拍をもつことはとても重要です。しかし拍節感をもって演奏してくださいというと、1拍目にアクセントを付ける方がいますが、そうすると非常に単調なグロテスクな音楽になってしまいます。それでは、どのようにすればよいのでしょうか？実は1拍目をほんの少し長めに取ることによって、拍節感を出すことができます。これでアクセントを付けることなく拍節感を出すことができます。このように全ての拍は平等ではなく、またどの1拍目も平等ではありません。曲によってどの1拍目が長いかということは、その曲によって、違うわけですから、弾きながら見つけていくしかないわけです。しかし拍節感というものは、必ず存在しています。

### 譜3



それでは、モーツァルトのK310 イ短調のソナタの2楽章（譜3）をみてみたいと思ひます。これは、3拍子ですから1拍目が重要なわけですね。しかも、1つの拍の中で、優劣関係が存在しています。最初のアウトタクトは、3拍目の弱拍で悪い拍なのですが、これをどれも平等にひきますと、ファラドファ・・に方向性がありません。まず最も重要な音は拍の頭に来ている音、この頭の音（f）であり、いい音です。その裏の音（a）は悪い音、次の表の音（c）は、最初のfの音よりはいい音加減が弱いのですが、いい音です。最後のfは悪い音です。ですから優劣関係は、

### 譜2

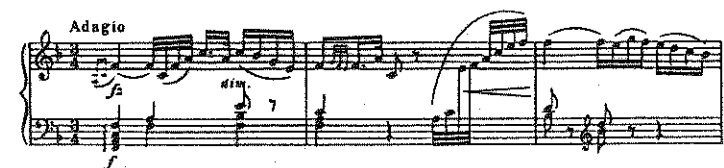


優、劣、優、劣、となります。そしてここにはレガートがついています。レガートというのは最も大切な音から派生した音群なので、クレッシェンドしていくということは考えられないわけです。例えばこれを言葉に置き換えてみましょう。このファラドファを「えんびつ」という言葉に置き換えてみましょう。「えんびつ」の「ん」はひっこみますよね。「つ」は、「び」の後ろにくっつく音として存在します。これをどれも同じように発音すると、外人が日本語を話しているようになりますね。流暢な日本語を話す日本人でしたら、「ん」ははっきり発音されないわけです。音の固まりというのは、その中でも抜ける音、前の音から発生している音というのがあって、それで、ひとつの音の固まりになっています。ですから演奏するときも、音の優劣関係を考え演奏してもらいたいと思ひます。

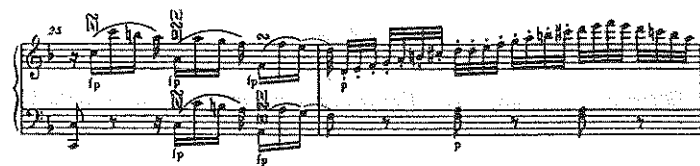
そして次にハイドンのソナタ、Hob.XVI/50のソナタの2楽章（譜4）を見てもらいたいと思ひます。これも4分の3拍子です。弾いてみるときのどの音も平等に大切に丁寧に弾くと、音楽の緩急がなくなってしまうのです。ですから、悪い音つまりあまりしっかり弾かないで欲しい音、このような音を捨てることによって、緩急が付き拍節感にも結びついていきます。

その良い音、悪い音の派生した例でイネガールというものがあります。フランスのバロックで多く行われるものなのですが、不均等、不平等、という意味です。現代でもフランスはセンスの洒落た国ですが、当時から4つ並んだ八分音符の音型も付点に近いリズムでスウィングする感覚で演奏され洒落ていたのです。バロック時代と近い、古典派の音楽には実はこのイネガールが多く存在します。たとえば、モーツァルトのソナタのa-mollの2楽

### 譜4



## 譜5



章では、9小節目、ここはまさしくイネガールするところです。12-13小節もイネガールすると音楽的になります。このように装飾音符がなくても26小節目(譜5)は、途中までスタッカートがあり、次はイネガールした方が、モーツァルトの音楽に適しています。しかしこれはもちろん強制ではないので、たとえばスタッカート等好きなことをして良いのですが、絶対やってはいけないのが、どれも平等という弾き方です。これは大変趣味の悪いことと思われていました。このように当時は必ず優劣関係があったことが常識の中でそれを無視するということはとてもユニークに聞こえるため、わざと拍節感を持たないで欲しい(つまり奇妙に聞こえることを要求)という指示もありました。

ハイドンのC-durのソナタHob.XVI/50の1楽章は4分の4拍子ですが、その冒頭の八分音符に「どれも同じに弾いてくれ」というふうに指示しているのがダーツです。ダーツには幾つかの意味があります。現在よく知られている、スタッカートよりも短い、という意味の他にこの音を全部平等に弾いてくれ、という意味もこの時代よく使われていたダーツの意味なのです。

しかし、他にも面白い意味があります。モーツァルトの2楽章の6、7小節目では、7小節目の頭のcにダーツが付いています。ここを平等に、という意味ではなくて、実は前のフレーズがここまでだよ、という意味で終わりの印なのです。

## 【アーティキュレーション】

アーティキュレーションという言葉を知っていても、正しい意味を知っている人は意外に少ないと思います。この言葉は、日本語に直しますと音の処理の仕方、ということになります。ドシラソと弾くものにも、幾つかの処理の仕方があります。全部をレガートに弾く方法、それから全てを切る弾き方、二つずつのフレーズ、ひとつと三つ、もしくは、三つひとつ、いろいろな方法が考えられ、表現が変わってくるのですが、これをアーティキュレーションといいます。チェンバロというのは、強弱が付きにく

く、音に優劣関係を付けることが非常に難しかったため、アーティキュレーションが非常に重要でした。

日本語の文章に置き換えてアーティキュレーションを説明してみましょう。例えば、「このチェンバロはすてきね。」と言うとします。日本語を知らない人に、これをローマ字で書いて渡したら、

「このチェ、ンバロはす、てきね。」というふうに関連した場所で区切ってしまふかもしれません。言っている意味は何か分かって、非常に分かりづらい、もしくは全然分からなくなってしまう場合があります。これがアーティキュレーションを正しくしなければならぬ理由です。

音に置き換えてみましょう。「この」というのをc-fに置き換えて「チェンバロ」というのをg-a-g-fis、「は」はg、「すてきね」をg-a-h-cとします。これをアーティキュレーションをしないで弾くと、だらだらとなります。大袈裟にアーティキュレーションすると、また日本語の分からない人の言葉になってしまうので、流暢にやるときちんとアーティキュレーションしながら、きちんと意味の通じる言葉になります。また最も伝えたい言葉の前をはっきりアーティキュレートするのは、言葉の集まりが文章になるように、アーティキュレーションした音たちの固まりがフレーズなのです。先程お話しした拍節感とアーティキュレーションは、古典派の命ですから、絶対忘れないで覚えて頂きたいと思ひます。

## 【即興演奏】

バロック、古典派の重要なことのひとつとして、即興演奏というのがあります。即興演奏というのは、その場の雰囲気に合わせて演奏するということなのですが、残念ながらクラシックの世界ではすたれつつあります。C.Ph.E.Bachもモーツァルトもベートーヴェンもみな即興演奏が非常に上手で、ベートーヴェンなどはウィーンに出てきたとき、作曲家と知られる前に即興演奏の名人として知られていたほどです。音楽をインスピレーションによって即興しながら演奏し、音楽の生命力になっていったわけです。ですから古典派の音楽は楽譜通りに演奏するのではなく、実は即興の精神をもって演奏することが非常に重要になってくるのです。

また変奏曲というのは、もともと演奏にいった場所でテーマを与えられる、もしくは、その土地で流行っている曲を元に変奏していくもので、即興演奏の一つの方法でした。ですから即興のセンスをもっ

て、変奏曲も演奏してもらいたと思います。そして協奏曲のカデンツァでは当然演奏者の自作のものが演奏されました。またカデンツァの小さいものにアインガングがありますが、これこそ必ず即興の精神で音楽に息吹きを与えて演奏して下さい。

## 【ペダル】

ピアノ音楽の大きなメリットのひとつとして、ペダルが上げられます。チェンバロにはペダルという物はありませんでしたが、フォルテピアノの時代になり、ダンパーを上げ続けることによってペダルの使用が可能になり、ピアノの音楽は非常に多彩になってきます。この時代の作品の中でOpenPedal(ペダルを踏んだままで)と書いてあるところを、現代のピアノで行うとかなり濁ってしまいます。そういう場合はペダルを少し浅めに踏むといいと思います。ペダルを踏み変えたりしますと、作曲者の意図が全く損なわれてしまいますから、濁るからふみかえるのではなく、ハーフペダルのようにすることによって、半分くらいもやにかかったような感じがでると思います。



上写真：クラヴィーコードを演奏する小倉先生。この日は激しい雨模様だったため、その音にかき消されるほどの小さな音だったが、会場に集まった方々は耳をすましてその音色を楽しんだ。

このペダルの有名な例で、ベートーヴェンの月光ソナタの例をあげたいと思います。楽譜の上にイタリア語で、「この曲の第1楽章はダンパーペダルを踏んだまま、ソフトにデリケートに弾いてくれ」とあります。これを現代のピアノで行うことはもちろん不可能です。しかしフォルテピアノでは、コンサートで演奏したこともあります。1楽章間ずっとペダルを踏んだままでも、まるでカリヨン(教会の鐘)が石畳のヨーロッパの道に響き混ざっていくような感じをうけます。楽器の音がひとつひとつクリアーで、そして減衰が速いためにそのようなことが可能なのです。「月光ソナタ」と通常私たちは呼びますが、月光というのは後の人が付けた名前であり、ペー

ーヴェン自身は「ファンタジア」といっています。現代のピアノでもそういう音をイメージして演奏すると素敵だと思います。

なぜペダルの話をしたかと言いますと、ショパンとかラヴェルでは、音が交ざり合った美しさがあることを皆様知っておられるのですが、古典派の音楽はペダルは少ししか使わないと思っただけじゃなく、のかもしれないと思っただけです。実は古典派の音楽も禁欲的な世界というのではなく、和音が重なっていく美しさというのをも求めることができました。ただ現代のピアノで弾いていると汚い濁りになるので、踏んだままのペダルは趣味の悪い人だと受け取られてしまうのです。

またベートーヴェンの悲愴ソナタの冒頭部分で音の減衰を比較してみます。実は、ベートーヴェンは、最初の和音の音が減衰して小さくなってから次の和音を弾いたと言われていて、さてこれを現代のピアノでやってみるとどのような減衰の仕方をしましょうか。現代のピアノだと音が大きくなかなか減衰しないため、なかなか次の和音を出すことができません。このようにフォルテピアノで演奏して最も違ってくるのはテンポ感だと思います。構成されている音の膨らみが大きい小さいかによって、次の音を出してくる速さが変わります。そのような点を意識すると現代のピアノで演奏する際もアーティキュレーションがはっきりし、音楽作り、タッチなども大きく変わってくると思います。

このように古典派の語法について話してきましたが、拍節感覚、アーティキュレーションというのを身に付けていただけて知っていただくというのが、非常に重要だと思います。

ただこのように身に付けた知識をそのまま演奏するとうまくいかかという、そういうわけではありませぬ。今日お話ししたことを1年間くらい心がけていくとかなり身につきます。それが意識せずにできるようになって始めて古典派の語法が使えるようになってきます。そして古典派音楽の生まれた理由の人間の様々な感情を表すという表現がはじめて可能になってくるのです。それが古典派音楽の語法なのです。今日の講座を通して、古典派の音楽に親しみを持って頂けたら嬉しく思います。